

俳人の「俳」とは、人偏に非。我が身を含めて、変人も多い。変人といつても、様々な変わりようがあるが、自分の墓碑銘に月給の額を記すというのは、なかなかの変人である。

俳人の名は、正岡子規。結核性の病気で脊椎カリエスという、当時でいえば不治の病を抱え、三十六歳で亡くなった男だ。

死の四年前、彼は自らの手で墓碑銘を記した。自分の名前、幼名、俳号を書き連ね、「伊豫松山二生レ東京根岸二住ス」と生地と居住地を書き、父母にも触れ、さらに「日本新聞社員タリ」と自分の職業を記し、最後に「明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十圓」と結ぶ。言うまでもなく、〇の部分には、実際に自分が死んだ日付や年齢が入るというわけだ。

ここまで読んだだけでは、暗い悲愴感を抱く読者もおられるだろうが、子規自身はいたって明るい。そこが変人たる所以でもある。

俳句仲間であり野球仲間であった友人から、シャンパンが贈られてきた。それがすこぶる美味しかった。感激した子規は、そのお札状に、こんな墓碑銘を添えるのだから、やはり変わっている。

面白がって書いてはいるが、自分が三十代で死ぬことは覚悟している。自分を客観的に眺めつつ、真面目にふざける。子規はそんな



絵・江口修平

## 子規とお金

夏井いつき

変人であったのだろう。

若い頃（といつても、弱冠三十六歳で亡くなるのだが）、お金にルーズであった子規だが、病気を得て後の著書『仰臥漫録』には、モノの値段が「オミヤゲ焼栗一袋（十個人二錢）」「夕飯 鰯二尾（十四錢）」という具合に記されていたり、俳句仲間たちの家賃のリストが「虚子（九段上）十六圓」「碧梧桐（猿樂町）七圓五十錢」「秀真（本所緑町）四圓（置建具ナシ）」と書かれていたりするのも可笑しい。

### 萩咲て家賃五円の家に住む 子規

墓碑銘に「松山藩御馬廻加番タリ」と記される父隼太が亡くなった後、長男としての自分を思う。月給が三十圓になった時、子規は、母や出戻りの妹を養うことができる喜び。結核菌に侵され、腰からダラダラと膿を出し続けつつ、母や妹の看病に頼りつつも、一家の長として稼げていることが子規の誇りだ。そしてそれは、一家三人が日々のご飯を頂ける大きな安堵でもあったろう。

墓碑銘に刻んだ「四十圓」は、働いてきた己の価値を己に納得させる数字であり、こんな墓碑銘を書いてから死ぬ自分を大いに楽しむ、変人ならではの快活なユーモアでもあるのだ。

なついいいつき●俳人。1957年生まれ。松山市在住。俳句集団「いつき組」組長、藍生俳句会会員。第8回俳壇賞受賞。第72回日本放送協会放送文化賞受賞。第4回種田山頭火賞受賞。俳句甲子園の創設にも携わる。帝塚山学院大学客員教授。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」等選者。2015年より初代俳都松山大使。句集『伊月集 鶴』、『夏井いつきのおウチ de 俳句』、『瓢箪から人生』等著書多数。



写真：御厨慎一郎